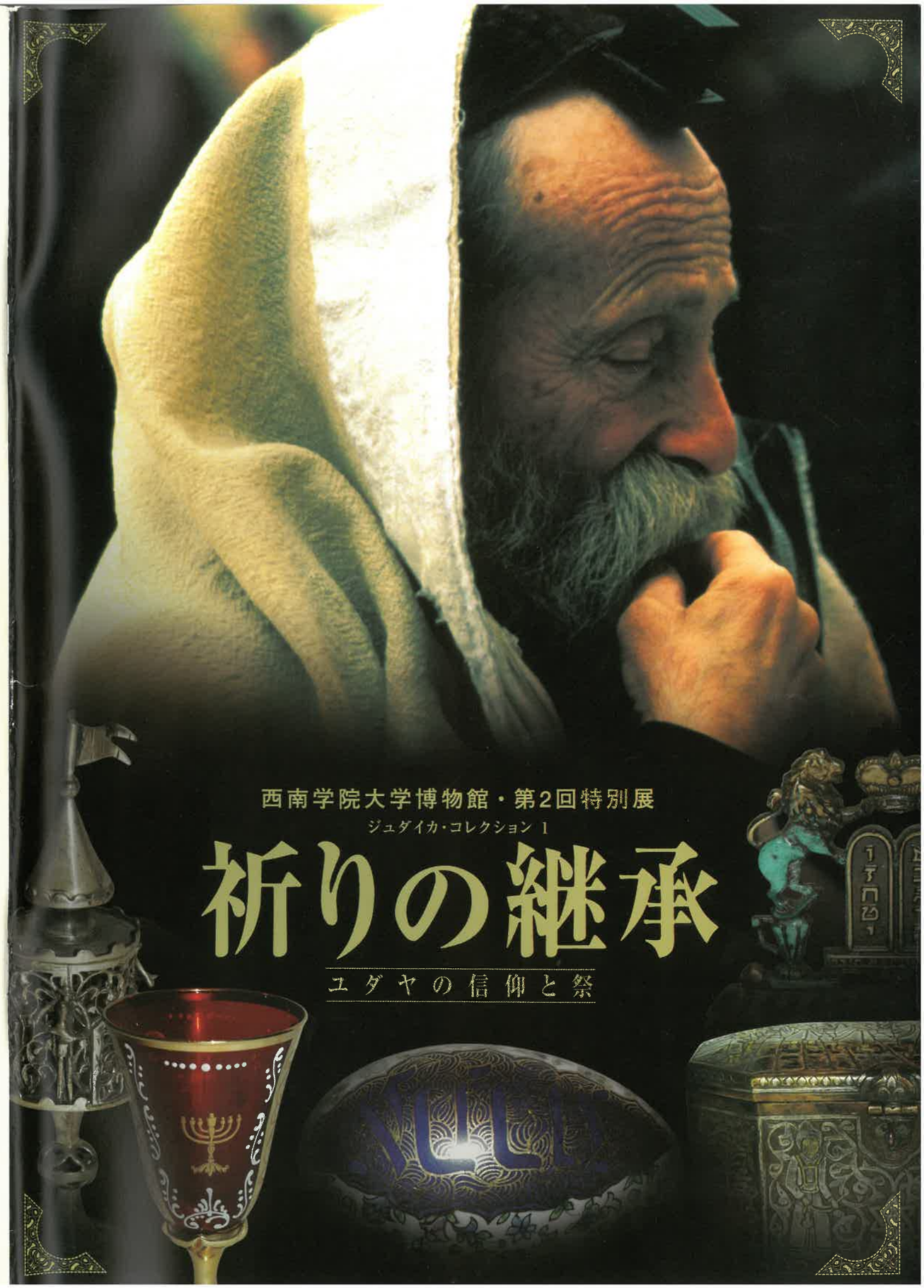
西南学院大学博物館
SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM
www.seinan-gu.ac.jp/museum/index.html



西南学院大学博物館・第2回特別展

ジュダイカ・コレクション 1

祈りの継承

ユダヤの信仰と祭

正誤表

本図録 33 ページに訂正箇所がございました。訂正し、お詫びいたします。
お手数ですが、以下をご確認の上、ご利用下さい。

(誤) 70　ヤド　長さ 25.5cm　銀製　現代　ベン・イェヘズケル作
(正) 70　ヤド　長さ 30cm　銀製　イエメン

(誤) 71　ヤド　長さ 30cm　銀製　イエメン
(正) 71　ヤド　長さ 23cm（環を含むと 25cm）　銀製　北アフリカ

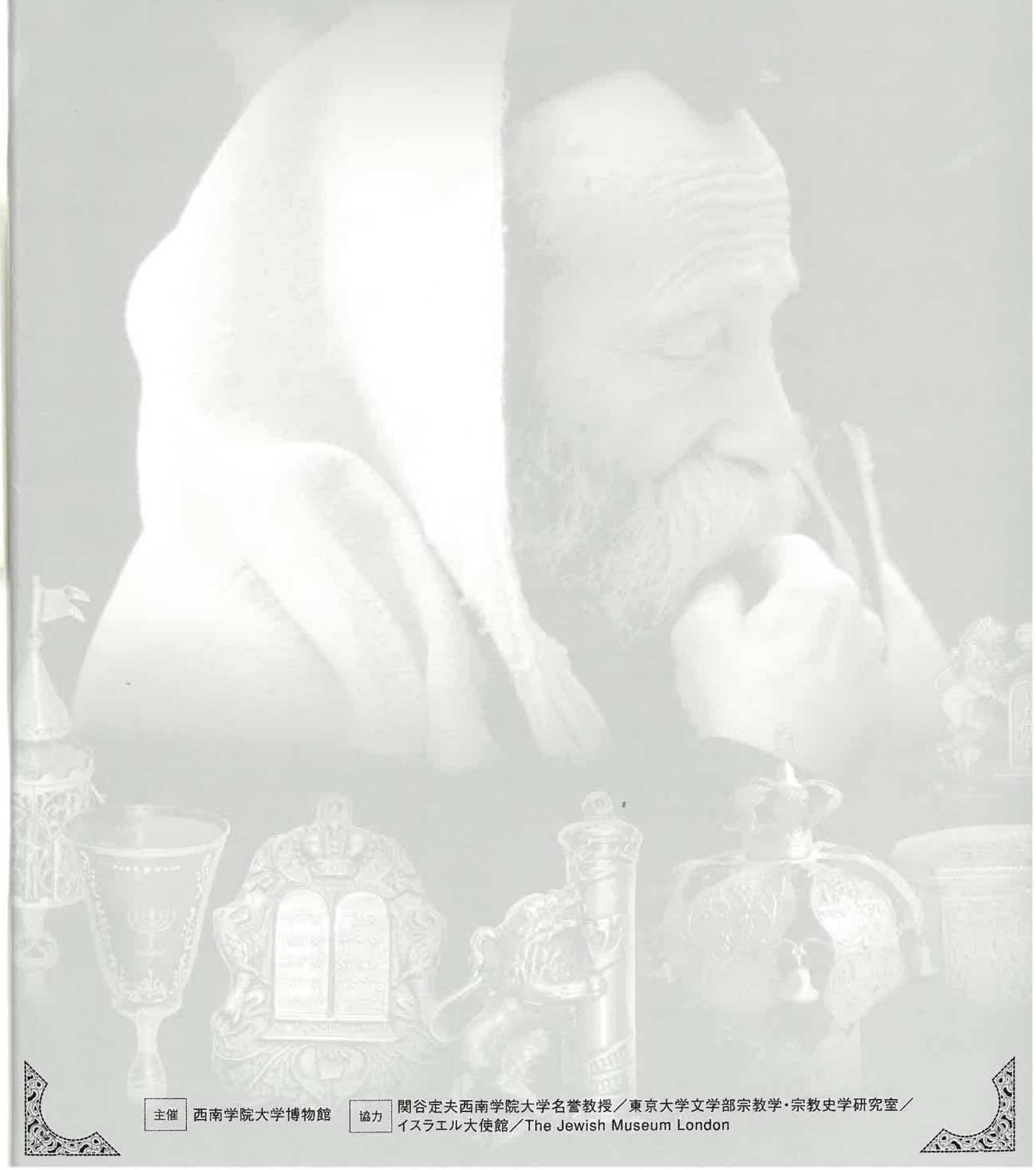
(誤) 72　ヤド　長さ 23cm（環を含むと 25cm）　銀製　北アフリカ
(正) 72　ヤド　長さ 25.5cm　銀製　現代　ベン・イェヘズケル作

西南学院大学博物館・第2回特別展［ ジュダイカ・コレクション1 ］

祈りの継承

ユダヤの信仰と祭

2007. 10.29 MON ▸ 12.15 SAT



主催　西南学院大学博物館

協力　関谷定夫西南学院大学名誉教授／東京大学文学部宗教学・宗教史学研究室／イスラエル大使館／The Jewish Museum London

はじめに

キリスト教の淵源をたどればユダヤ教にいたります。本学博物館はキリスト教文化に関する展示と研究を課題としていますが、国内の博物館には珍しい多くのユダヤ教に関する資料を展示しており、特色の一つとして注目されています。このようなユダヤ教への関心には、本学の関谷定夫名誉教授のユダヤおよびユダヤ教に関する御学問に啓発されたものがあります。

関谷教授はご自身で数多くの資料を収集されたジュダイカ・コレクションをお持ちです。この関谷コレクションは、ユダヤの人々の社会や生活、なかでも思想形成の泉となっている聖書の理解のため、そしてキリスト教とユダヤ教を比較検討するために必要な実物（考古学的・図像学的）資料が包括されており、しかもこれらの資料の多くが宗教儀礼や生活の場で実際に使用された貴重な一括資料である点に特色があります。それは日本だけでなく、イスラエルの博物館を除けば、世界的にも類を見ない内容をもっています。

かつて関谷教授が定年退職をされる折に、自宅を博物館相当施設として改装し、これらのコレクションを常設展示して市民の皆様に公開したいというご相談を受けたことがあります。残念ながらこの計画は実現しませんでしたが、私自身もそれ以来、この貴重なジュダイカ・コレクションの公開の機会を模索しておりました。

昨年春、本学博物館が開館しました。私の念頭にありましたジュダイカ・コレクションの公開を、関谷教授が永年勤務された本学で実現できたらと切望し、先生そして奥様とご相談いたしました。そしてその願いを今回第２回特別展『祈りの継承―ユダヤの信仰と祭―』として果たすことができました。感謝いたします。『ジュダイカ・コレクション１』としておりますのは、今後も関谷コレクションの精華を順次展示していくことの表明でもあります。

最後になりましたが、ユダヤの民の教えや生活・文化に触れられ、キリスト教の母胎へ思いを馳せていただければと願っております。

2007年10月29日
西南学院大学博物館長　**高倉　洋彰**

目次

はじめに［高倉洋彰］ …… 02
目次 …… 03
「祈りの継承」展によせて［関谷定夫］ …… 04
関谷定夫ジュダイカ・コレクションの展示に際して …… 05
シナゴーグ、ユダヤの暦 …… 06
祭礼解説 …… 07～11
- ティシュリ月 …… 07
- キスレヴ月、テーヴェト月、シュヴァト月、アダル月 …… 08
- ニサン月、スィヴァン月 …… 09
- タンムズ月、アヴ月、毎週土曜 …… 10
- 通過儀礼、食事に関する戒律と祭礼 …… 11

図解 …… 12～34
- トーラーとトーラーケース、トーラー、冠、胸当て …… 12
- エトログ・ボックス …… 13
- ハヌキヤ、大型ハヌキヤ …… 14～15
- メノラー …… 16
- メギラー、グラッガー …… 17
- セデル皿、バルセロナ・ハガダー …… 18
- 鳥頭ハガダー、サラエボ・ハガダー …… 19
- ロスチャイルド詞華集、ウォルムス・マハゾル …… 20
- スパイス・タワー …… 21
- キドゥシュ・カップ …… 22～23
- ハブダラ・セット、シャバット・ランプ …… 24
- ツェダカー・ボックス …… 25
- ネル・タミード …… 26
- 割礼器具、割礼用カップ・割礼参考図、キッセー・エリヤフー …… 27
- ケトゥバー …… 28
- 結婚指輪 …… 29
- メズーザー …… 30～32
- ヤド …… 33～34

ユダヤ教の戒律世界との出会い［市川裕］ …… 35～37
ユダヤ教とユダヤ人の歴史、参考文献 …… 38～39
展示・編集後記［米倉立子］ …… 40

*執筆者が明記されていない項は米倉立子が担当

「祈りの継承」展によせて

キリスト教を理解するためには、その源流としてのユダヤ教を知らねばならない。先に上梓した『シナゴーグ』*1を著するにあたって、永いこと各地のシナゴーグ（ユダヤ教会堂）を巡り歩いた。ユダヤ人は祖国を失って世界中に離散しつつ、ディアスポラ（パレスチナから他の世界に離散したユダヤ人、またその共同体）として各地にシナゴーグを形成してきた。そこで用いられるジュダイカでも、そのおかれた土地土地で多様な特色をもっている。それらジュダイカを学生諸君に、あるいはユダヤ教にふれる機会の少ない日本の人々に実物を見て知ってほしいという思いで永い年月をかけて収集してきた。

旅の途中で立ち寄ったテルアビブのある店でトーラーやトーラーケースを買い求めた際、遠い日本に運ばれるそれらのジュダイカを店主夫妻は正装し祈りを込めて見送ってくれた。

これらコレクションの小さな一つ一つがその困難な時代の歴史を物語っているように思われてならない。

このたび西南学院大学博物館の企画により、その一部をご紹介できることを感謝するとともに、ご来館の皆様方のジュダイカならびにユダヤ教を理解する一助になれば幸いである。

*1　関谷定夫著、『シナゴーグ』、リトン、2006年。

2007年10月
西南学院大学名誉教授
関谷　定夫

関谷定夫ジュダイカ・コレクションの展示に際して

今回、展示されているジュダイカ資料は、聖書考古学を専門とする関谷定夫西南学院大学名誉教授（1925年生〜）が、長年の研究の中でイスラエルを中心に各地から精力的に収集されてきたもので、日本においては質・量共にこれに比肩するジュダイカ関連資料のコレクションはなく、非常に貴重なものです。また、本展のような実物のジュダイカ資料を一堂に集めた展示も日本においては初めてになります。

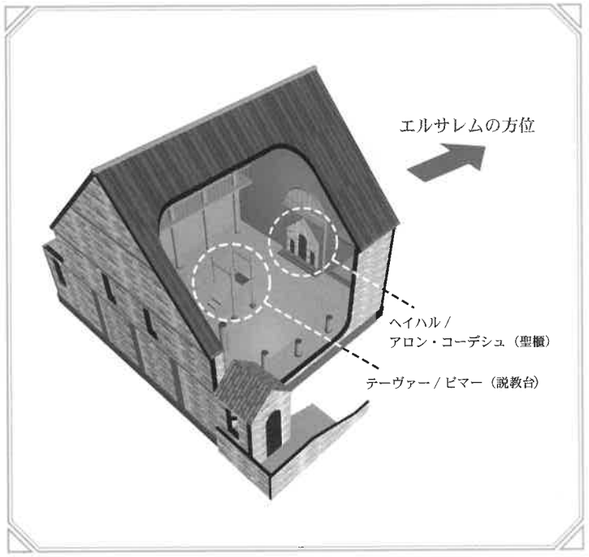
ジュダイカとは、アルファベットではJUDAICAと表記しますが、ユダヤ教の典礼や祭礼で用いられる、美術工芸としても優れた道具類の総称で、世界各地に暮らすユダヤの人々の日々の生活や行事において欠かすことは出来ません。ユダヤの人々は、その生誕から亡くなるまで、そして巡り来る一年においても多くの宗教儀礼を繰り返し行い、先祖からの歴史を学び、コミュニティーの結束を確認し、自らのアイデンティティーを確立していくのですが、その際にジュダイカが必ず用いられるのです。

しかしながら、一般的に日本においては、ユダヤ人に対する迫害の歴史やパレスティナの紛争の報道など、非常に重く、深刻で強い印象を与える内容に触れることはあっても、情報の種類の幅が限られていて、ユダヤ教、そしてユダヤの人々の日常生活について近しく感じる機会は多いとはいえません。一見「遠くて、分かりづらく、自分とあまり関係ないと感じてしまう」世界に対して、様々なアプローチがあると思いますが、そこに暮らす人々の日々の生活習慣や大事に守っている祭礼・儀式といったものを少しでも知ってみると、その分人々の「顔が見えてきて」少しばかり心理的な距離が縮まるということは、皆さんにも経験があることではないでしょうか。本展において、実物資料や解説、映像などを多様な視点からご覧になっていただくなかで、これが今までよりも少し遠くへ、あるいは少し深くに「橋を架ける」機会となれば幸いです。

2007年10月
西南学院大学博物館

シナゴーグ、ユダヤの暦

〈シナゴーグ〉



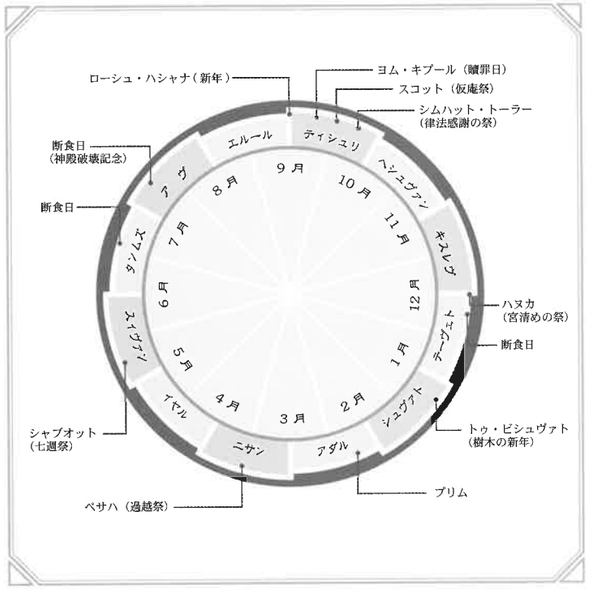
シナゴーグとは、もともと会合を意味するギリシャ語を語源にしたユダヤ人コミュニティーを意味しますが、それから転じて、ユダヤ教の礼拝所、共同体センターとしての二重の役割を担う会堂のことを指します。

その起源については、ソロモンによるエルサレムの第一神殿の時代やバビロン捕囚以降の時代など諸説あり、正確なことはいまだ判明していません。紀元後70年にエルサレムの第二神殿が破壊された後には、神殿で行われていた慣習や儀礼の多くをシナゴーグが受け継ぎ、ユダヤ人の宗教生活の中心となりました。

形や大きさなどに関して特に条件がないため、建築的特徴にそれぞれ違いがあっても、礼拝所としての用途がシナゴーグの内部構造を規定しています。建物の外観は、その土地や時代の建築様式の動向を反映する傾向にあり、ヘブライ文字や2つの正三角形を逆に重ねたダビデの星、七枝の燭台メノラーなどのユダヤ教の象徴をつけることもあります。

建物全体がエルサレムに向いていなければならず、内部には、エルサレムに向いた壁面にしつらえられたヘイハル、あるいはアロン・コーデシュとよばれるトーラーを納める聖櫃とテーヴァーまたはビマーといわれる説教台が設置されます。その説教台で司式者が祈祷を先導したり、指定されたトーラーの章節を朗詠したりします。聖櫃の上には、「永遠の灯火」ネル・タミードとよばれるランプが下げられています。また、会衆用の椅子の座り方については、同じユダヤ教の中でも派によって男女が混じって座る場合や別々に分けられる場合があります。

〈ユダヤの暦〉



ユダヤの暦は、各月が新月に始まり、各年は太陽の周期に基づく、通常一年が12か月の太陰太陽暦です。新月の日から新しい1か月が始まる太陰暦では1か月が29日ないし30日になるため、西暦とユダヤ暦では1か月の区切りが一致せず、2、3年に一度の間隔で太陽の周期とのずれを解消するために閏月として、アダル月の後に13か月目の第二アダル月が挿入されます。また、西暦ではなく、創世記冒頭に記された主の世界創造から年数を数えます。それは紀元前3760年とされ、ユダヤ暦では9月に新年を迎えて年が改まるため、西暦2007年10月には世界創造から5768年目になっています。一日は、夜明けに始まるのではなく、日没とともに始まり、翌日の日没まで続きます。一週間は、日曜日を第一日とし、金曜を第六日というように数え、第七日にあたる土曜日がシャバット（安息日）とよばれます。

ユダヤ教では、祭日には宗教的・歴史的意味があり、さらには元来の農耕に基づいた生活から生じた祝祭もあります。2000年近く、世界各地に散らばって暮らしてきたユダヤ人にとって一年を通じた様々な祭礼は、自分たちのアイデンティティーの確立と維持のために非常に重要な意味を持っています。伝統的な祭礼を繰り返し、世代を超えて伝えていくことにより、祖先の歴史を知り、時代や場所が変わっても自分がユダヤ人であるという自覚を強く認識するのです。

祭礼解説

ティシュリ月 | 9〜10月

1・2日（〜10日）

ローシュ・ハシャナ（新年）・ヨム・キプール（贖罪日）

新年は悔い改めから・・・

ローシュ・ハシャナは悔い改めのための聖日で、2日間続きます。天地創造を記念する行事が行われ、シナゴーグ（ユダヤ教会堂）でショーファル（羊の角笛）が吹き鳴らされて、新年の到来が告げられます。天地創造の記念日に神は全ての人の行いを審判し、その結果によって新しい年に罰を与えるか否かを決定します。ただし、ティシュリ月10日目のヨム・キプールの到来までに改悛し、祈りを捧げ、善行を積めば、好ましくない決定を避けることができるのです。新年とともに始まる「悔い改めの10日間」の頂点がヨム・キプールの日で、その日には人々は罪を償うために断食をして改悛と祈りに専念します。

ショーファルを吹く男性

3日

断食日

新年が到来して、悔い改めの10日間が続く中でのティシュリ月3日目の断食は、紀元前6世紀に暗殺されたゲダリアの死を悼むためのものです。ゲダリアとは、バビロニアによってユダ王国が占領された際にパレスティナの総督に任命されたユダヤ人のことです。彼は、戦いで荒れた土地の復興を計りますが、アモンの王バアリスが、ユダの王家の血をひくイシュマエルをそそのかし、イシュマエルはついにゲダリアを宴の席で殺害してしまいます。この事件を忘れないための断食日です。

15日から8日間（9日間）

スコット（仮庵祭）

粗末な小屋で荒野に暮らした先祖の苦難を追体験

聖書時代に遡るエルサレム巡礼の三大祝祭の1つで、秋の収穫の祝祭でもあります。祭日は9日間（イスラエルでは8日間）続き、この間人々は庭やテラスに特別に築いた仮庵としての小屋で暮らすか、少なくとも食事を小屋の中でしなければなりません。

ユダヤの民が神に導かれて、モーセをリーダーとしてエジプトを脱出した後、神の定めた約束の地に到着する前、40年間にわたり荒野をさまよいながら仮庵に暮らしたことを記念するもので、シナゴーグでは毎日行列が行われます。人々は、神を賛美する歌を歌い、良い香りのするエトログとよばれるレモンに似た柑橘類の実とルーラブ（シュロの枝）をミルトスとヤナギの枝に結びつけた束を上下に揺らしながらテーヴァーまたはビマーといわれる説教台の周りを行列します。

7日目はホシャナ・ラッバ祭で、6日目までは1日1回しかシナゴーグを巡らなかった行列が、1日7回も巡回し、トーラーの巻物が会衆に見せられます。この行列は、かつてエルサレム神殿で祭壇の周りを巡回した行列を追想するものです。ホシャナ・ラッバのホシャナとは「救い給え」という意味で、キリスト教の新約聖書の福音書にでてくる「ホサナ」はそれがなまったものです。

屋根にシュロを載せた仮庵の小屋

ホシャナ・ラッバ

真剣な眼差しでルーラブを選ぶ男性たち

23日

シムハット・トーラー（律法感謝の祭）

読了!でも間髪いれずに再出発!

一年間続けてきたトーラー朗読の完了を祝う祭です。この日に『モーセ五書』の一年間の公的朗読が一巡して終わり、新たなサイクルが始まります。シナゴーグでは、トーラーの巻物を掲げて行列しながら祝います。サイクル一巡において、朗読箇所の最後を読み終えることと新たに冒頭のくだりを読み始めることは大変な名誉であると考えられており、その担当となった者はそれぞれ、ハタン・トーラー（律法の花婿）、ハタン・ベレーシート（創世記の花婿）とよばれます。

トーラーを担ぐ男性たち

キスレヴ月 | 11〜12月

25日から8日間

ハヌカ（宮清めの祭）

不思議にも僅かな油で明かりは灯り続けたのでした

紀元前165年のハスモン家によるエルサレム神殿の再奉献を記念する祭です。紀元前3世紀末、ユダヤ地方はシリアのセレウコス朝に征服されました。民族構成が複雑な国家の統一のために、領内のヘレニズム化（ギリシャ化）が推し進められました。人々はそれぞれの信仰をやめ、ギリシャの神々につかえるように強制されました。ユダヤ人は守ってきた習慣を禁じられた上に、彼らにとって最も大切なエルサレムの神殿での儀式は停止され、神殿はユッピテル（ジュピター）神像が安置されたギリシャの神殿に替えられてしまいます。

この圧政に対して、ハスモン家の親子が反乱を起こし、ついにはエルサレムの神殿を奪回し、汚された神殿を清め再奉献したのでした。この対シリア反乱は、「マカバイの反乱」とよばれますが、それはハスモン家の一人、勇者ユダの異名から取られたものです。勇者ユダ・マカバイが神殿を奪回した際に、燭台を灯すための油が発見されましたが、それは僅か1日分にも満たない量でした。しかし、それを灯してみると8日間燃え続けたとされています。この奇跡を記念して、ハヌキヤという8つの枝とシャマシュとよばれる点灯用灯火の受け皿（9本目の枝になっていることもある）をもった特別な燭台に1日1枝ずつ火を灯していき、8日目にシャマシュと8本の枝全てに火が灯るようにします。

火を灯す少年

テーヴェト月 | 12〜1月

10日

断食日

『ゼカリヤ書』8章19節に言及されている4つの断食日の1つで、紀元前6世紀のバビロニアによるエルサレム攻囲を忘れないための断食日です。この攻囲により、前586年にエルサレムは陥落し、神殿は崩壊し、多くの捕虜たちがバビロニアに連れ去られました。

シュヴァト月 | 1〜2月

15日

トゥ・ビシュヴァト（樹木の新年）

「樹木の新年」とよばれ、イスラエルでは学校が休みになり、植樹の儀式が行われます。この日が月の15日であることに対応して、15の果物を食べるという習慣も広く行われており、その際にはイスラエル以外の土地の人々もイスラエルで収穫された果物を食べて、その地を想起します。

アダル月 | 2〜3月

13〜15日

断食日（13日）とプリム（14-15日）

滅亡の危機回避!ちょっと羽目を外してお祝いだ!

紀元前5世紀半ば頃のペルシア王クセルクセス（アハシュエロス）の時代、エステルとモルデカイという2人のユダヤ人が、ペルシアの大臣ハマンが企てたユダヤ人滅亡の計略を防ぎ、危機から救ったことを記念する、『エステル記』にちなんだ断食と祭礼です。プリムとは「くじ」の意味で、『エステル記』9章24-26章に記されているように、敵ハマンがユダヤ人根絶の実行日を決めるために投げたくじに由来します。

モルデカイの養女であった美しい娘エステルは、クセルクセス王妃となります。王はハマンを重んじますが、ハマンはモルデカイに対する恨みからユダヤ人全体を憎み、民族の滅亡を企てます。それを知ったモルデカイがエステルに伝え、彼女が身を挺して王に直訴して危機を救い、ハマンは処刑されます。そしてモルデカイがハマンの代わりに大臣になり、名声と力を得たというのが大まかなストーリーです。

仮装する子供たち

プリム祭は、前日に断食を行うところから始まり、『エステル記』9章22節に従って、隣人に料理を贈ったり、貧者に施しをしたりするのが慣わしです。プリム祭当日は、シナゴーグ（ユダヤ教会堂）における夕方と朝の礼拝で、『エステル記』を記した羊皮紙の巻物のメギラーが朗読されます。その際、集会に参加した子供たちが敵役のハマンの名前が出てくるたびにグラッガーを回して大きな音を立て、彼の名前が聞こえないようにして大騒ぎするという習慣があります。ハマンの名は約60回も出てくるのです。プリム祭は、ユダヤ人の祝祭の中でももっとも陽気で、聖書を題材にした道化劇や子供たちの仮装が行われます。

ニサン月 | 3〜4月

14日から8日間

ペサハ（過越祭）

神様から決められた食事メニューで、出エジプトを偲ぼう

聖書時代に遡るエルサレム巡礼の三大祝祭の1つで、隷属状態にあった父祖たちのエジプトからの脱出と解放を記念するとともに、春が訪れて新たな農耕の周期が始まることを感じさせる祭です。

過越という祭の名の由来は、以下の通りです。『出エジプト記』に記されるように、族長ヤコブとともにエジプトへ下った人々の子孫は始めは70人ほどだったのが、400年後には非常に人口を増やしており、エジプトのファラオはユダヤ人勢力を恐れ、彼らに苦役を強いるようになりました。ユダヤ人たちはこの隷属状態からの解放を求め、神は彼らの叫びに応じてモーセを指導者に選び、民を導きました。モーセは、ファラオに神の言葉を伝え、ユダヤ人たちがエジプトから出て行くことを許可するように求めましたが、ファラオは拒否しました。ファラオが神の警告に耳を貸さなかったため、ついにはエジプトに10の災いが下ります。その最後の災いが、人や家畜を問わず、エジプトの全ての初子を撃つというもので、いずれ王座につくことになるファラオの長子も例外ではありませんでした。その災いにユダヤ人たちは巻き込まれないように、神は子羊を屠ってその血を家の入口に塗って印をつけるように命じました。印の付いたユダヤ人の家は、神が災いを下さずに過ぎ越したため無事でした。神は、屠った子羊の肉を火で焼いて食べることと翌朝までそれを残してはならないこと、酵母を入れないパン（マッツォート）を苦菜（マロール）を添えて食べること、食事の際には腰帯を締め、靴を履き、枝を手にして急いで食べることなども命じます。第10の災いが下るとファラオはついに恐れをなして、ユダヤ人たちをエジプトから去らせることを許し、むしろ一刻の猶予も与えずに去らせようとします。

家庭でのセデル

神が命じた料理の仕方や食事の作法は、慌しくユダヤ人たちがエジプトから脱出し、解放されたことを記念するものです。そうした記憶が、この祭をことさらに食事に関する戒律に結び付けました。この時期、発酵した食物（ハメツ）、つまり酵母を含む飲食物は全て禁じられるので、祭が始まる前までに家の清掃を入念にして、発酵した飲食物に触れていたあらゆる食器や調理器具も徹底的に洗浄します。

ペサハ初日の夕方、セデルという儀礼的な晩餐を家族や親族が揃って行います。そこでは、マッツォートやエジプトでの隷属生活の苛酷さの象徴であるマロール、生贄にされた子羊を象徴する子羊の前脚のロースト（ゼローア）、エジプトで強制されたレンガ造りや漆喰を記念する果物の甘いペースト（ローセト）、生贄の供物を想起させる固ゆでの卵などの食べ物がセデル用の皿に並べられ、ワインも4杯飲むことになります。そしてハガダーとよばれる『出エジプト記』や『詩篇』の賛歌や歌が含まれた式文が読まれ、子供たちに祝祭の意味を教えます。ちなみにキリスト教においては、イエスが処刑されたのはこのペサハの時期であり、最後の晩餐はまさにセデルでした。それゆえに、このセデルがキリスト教の聖餐式の原型になったと考えられています。

スィヴァン月 | 5〜6月

6日あるいは7日

シャブオット（七週祭）

モーセは十戒を授かり、姑に忠実な未亡人ルツは落穂拾いから地主の奥さんに

聖書時代に遡るエルサレム巡礼の三大祝祭の1つで、ペサハの初日から数えて7週目に行われます。この祭は、ペンテコステ（5旬祭）といわれることもありますが、それはペンテコステがギリシャ語で「50番目」の意味で、ペサハから50日目であることに由来します。神殿時代には、この祝祭は小麦の初穂と果物の初物を神に奉納する農耕生活に基づいた意味合いがありましたが、シナイ山でモーセに十戒が啓示されたことを記念する日でもあります。

この日シナゴーグ（ユダヤ教会堂）では、『ルツ記』が読まれます。それはモーセを通じて神から与えられた律法をユダヤ人が受け入れたのと同様、異国モアブの女性ルツがユダヤ教を受け入れたことや麦の刈入れの話が語られていて、シャブオットにふさわしいからだとされます。ルツは、ユダヤ人の姑ナオミが夫も息子2人もなくし未亡人になってしまい、故郷のベツレヘムに戻った際に付き従う忠実な嫁でした。ルツは姑のナオミを助け、麦畑の落穂拾いをしながら暮らし、その人柄を見込まれてナオミの親戚のボアズという地主と再婚します。

キリスト教では『使徒言行録』に記されているように、このペンテコステに聖霊降臨を記念するという別の意味が付与されています。十字架上での死から復活したイエスは40日にわたって使徒たちの前に姿を現し、神の国について語った後、彼らの上に聖霊が下ると言い残して昇天します。その10日後、シャブオットの日に、使徒たちが集まっていると、激しい風のような音が聞こえ、天から炎のような舌が使徒たちに下り、彼らは聖霊に満たされ、さまざまな国の言葉で語り始めたのでした。そして各地へと伝道へ向かいました。

タンムズ月 | 6〜7月

17日

断食日

さまざまな忌まわしい記憶を忘れないための記念日です。いくつかのエピソードがこの日に起きたとされていますが、まずはモーセがユダヤの民の放埒ぶりに怒り、神から授かった契約の板を割ってしまった日と考えられています。神から十戒の板を授かったモーセがシナイ山から下りてくると、モーセの言いつけを守らずユダヤの民は黄金の牛の偶像を崇拝していました。それに怒ったモーセは契約の板を割ったのでした。

他にも、バビロニアに攻囲されたために神殿での犠牲の儀式に必要な生贄の動物を手に入れられずに儀式が中断された日として、またはユダヤの王のなかでも悪名高きマナセ王が、神殿の聖域に偶像を持ち込んだ日として、さらにローマ皇帝ティトゥス治下において、ローマ人たちがエルサレムの街に侵攻した日などとしても記憶されています。

アヴ月 | 7〜8月

9日

断食日（神殿破壊記念）

新バビロニアとローマによる2度のエルサレムの神殿破壊を悼むための断食日です。1度目はバビロニア王ネブカドネツァルによる紀元前586年の第一（最初の）神殿の破壊であり、2度目はローマ皇帝ティトゥスの命令に基づく火災による紀元後70年の第二（再建された）神殿の破壊を指します。哀悼を示すために、シナゴーグ（ユダヤ教会堂）に集まった会衆は椅子に座らずに床や低い座椅子に座ります。

エルサレム神殿の模型

毎週土曜

シャバット（安息日）

神様がお休みした日は特別です

シャバットはユダヤ教の祭礼の中でも最も重要なものです。神が世界を創造し、第7日目に休まれたことを毎週一度記念するのです。神が創造の仕事を休まれたように、人も自然を変容させる仕事を休まねばならないとされるため、火を使ったり、機械を操ったり、荷物を運んだり、一定以上の距離を移動することなどの活動をしてはならないとされるのです。ただし、人の命を救ったり、病人の世話をする場合は別です。したがって、シャバットの前日のうちに食事やそれを暖める火などを準備しておかねばならないのです。

シャバットは、金曜日の日没前、シャバット・ランプが1つ2つ灯された時から始まります。シャバットの過ごし方は社会によって、また家庭や個人によっても異なりますが、敬虔な男性たちはシナゴーグ（ユダヤ教会堂）で夕べの礼拝を行ない、家に帰ります。シナゴーグでは、夜が明けた土曜の朝から午後にも祈りが捧げられ、シャバット全体で計4回の祈りが捧げられます。一方家庭においては、シャバットの晩餐が重視されます。晴れ着を着て、食卓にはパンを2つ置き、一家の長である父親が杯（キドゥシュ・カップ）に注がれたワインに聖別の祈り（キドゥシュ）を捧げて、食事が始まります。空に3つの星が現れてシャバットが終わる前に、家族は再び集まりシャバットとの別れの儀式を行います。祈りを捧げ、シャバットと新しく始まる週の区切りの儀式、「隔て」を意味するハブダラを行い、シャバットが終わります。

通過儀礼

人生の節目を刻む

ユダヤ人の一生は、トーラーの教えに則った通過儀礼によって、その節目節目を刻んでいきます。伝統的にユダヤ教は、男性に比重を置いた規定が多いのが特徴的です。もちろん現代においても「生きた宗教」として、時代や地域の社会情勢・社会的通念の影響や要請を受けて、ラビ（ユダヤ教の律法教師のことで、ヘブライ語で「わが主人」、「我が師」を意味します）の律法解釈が少しずつ変化したり、派によっては性差による比重差を積極的に解消したりもしています。

シナゴーグ内部の聖櫃（関谷定夫氏提供）

ユダヤ人の一生における主要な通過儀礼は、男児への割礼、宗教的に成人と見なされるバル・ミツヴァ、結婚、葬儀などがあります。

割礼は、男児の生後8日目に行われます（詳細は割礼器具の資料解説をご覧下さい）。男の子は13歳になるとバル・ミツヴァ（「戒律の男児」の意味です）となり、自身の行動に責任を持つ成人の仲間入りをしたと見なされ、トーラーに従った生活を始めるようになります。バル・ミツヴァの祝いで初めてタリート（肩衣）とテフィリーン（聖句箱）を身につけてシナゴーグに入り、トーラーの相応しい章節を朗読することが慣習となっています。現代においては、派によっては12歳になった女の子に、バト・ミツヴァの祝いを行う場合もあります。

通常結婚は、婚約（キドゥシーン）と結婚式（ニッスィーン）の2つの要素からなっています。婚約は証人たちの前で行われ、花婿から花嫁に贈り物を渡し、婚約を宣誓し、祝福が唱えられて、1杯のワインを新郎新婦で分かち飲みます。その後の結婚式では、新郎新婦はフッパーとよばれる、彼らの新居の象徴である婚礼用の天蓋の下に立ちます。そこでも祝福を受け、1杯のワインを分かちます。それから人生最大の喜びの際にもエルサレム神殿の崩壊を悼むために、花婿がワイングラスを割るという儀式が行われ、披露宴へと続きます（詳細はケトゥバー関連の展示解説をご覧下さい）。

ユダヤ人の葬儀では、「ヘブラー・カディシャー」（聖なる兄弟団）とよばれる互助組織が一連の作業を行います。遺体は埋葬に先立って清められ、経帷子に包まれてから、墓地に運ばれて埋葬されます。基本的には土葬ですが、派によっては火葬の場合もあります。服喪の期間は、近年は簡素化する傾向がありますが、伝統的には7を意味する「シブア」とよばれる7日間と、それに引き続く死後30日目までのより緩やかな服喪で、30を意味する「シュロシーム」の間続くとされ、親の死に対しては1年間続くとされています。遺族は、葬儀に先立ち、深い悲しみを象徴する仕草として自分の上着を引き裂きます。また、「シブア」の服喪の間は床に直接座るか背の低い椅子に腰掛け、労働や仕事、入浴や散髪、革靴の使用を慎みます。

食事に関する戒律と祭礼

食べて良いもの悪いもの

祭礼時だけでなく、ユダヤ人の日々の生活で守られるべき大事な戒律として、食事に関する戒律も大きな要素です。ユダヤ人は世界中に離散したので、各地の食材や調理法、料理事情に影響を受け、それらを採用しています。それでもトーラーの教えに則り（『レビ記』11章、『申命記』14章）、細かい規定が守られ続けています。

食材に関する規定では、野菜はすべて適法で、食べることができます。地上の動物のうち、ウシやヒツジのようにひづめが割れていて、反芻する動物の肉は食べて良いとされます。ですから、ブタ、ウサギ、ラクダなどは食用から除外されます。鳥肉については、他の鳥や魚、死肉を食べたりする猛禽類などを除いてすべての鳥肉が適法とされます。水中の生物は、ウロコとヒレをもつ魚はすべて食用に適します。

食材に関する戒律とともに、調理方法に関する戒律もあります。肉については、食べても良いとされる種類の動物の肉である上に、熟練した屠殺人（ショーヘート）によって、戒律に則って屠殺されたものでなければなりません。その手順は、鋭い刃物で動物の喉を切って、速やかに血をすべて流し出し、体や臓器に傷がないか綿密に吟味し、脂肪と一部の決められた筋や坐骨神経を除去します。最後に調理前に残っている血を除くため、塩と水で処理をするというものです。またそうした肉類はすべて、調理の際にも食事の際にも乳製品から離しておかねばならず、調理道具同士も接触してはならないとされます。こうした規定をクリアした食べ物のみが適法（カシェル〔ヘブライ語〕、コシェル〔イディッシュ語〕）となります。

このような戒律は、もともとは衛生上の危険を回避したり、ユダヤ人大衆が何世紀もの間、経済的に恵まれる状況にはなく、料理の幅が厳しく制限されたりしたことなどと宗教的な規範の要請とが一体となって規定されてきたと考えられます。一般的には肉や魚を食べたのはシャバット（安息日）と祭日のみだったので、ある種の食物と祭礼が密接に結びつき、その食物が各祭礼の象徴的意味内容を強調する場合がしばしばありました。シャバットには魚を、プリム祭には甘菓子を、シャブオットには乳製品を、ハヌカ祭には甘菓子や小麦粉とジャガイモで出来た揚げ物を食べるのも、祭日を完全なものとするための儀礼的な食事が重視されたからです。つまり、ユダヤ料理は、食事に関する戒律とユダヤの祭日において象徴的な意味があるとされる特定の食材を集大成することから成立しているといえるでしょう。

凡例

●各作品のキャプションは次の順によった。
作品名／サイズ／主な材質／年代／由来
（記載のない場合は不詳）

01

トーラーとトーラーケース　トーラー：高さ53cm（エーツ・ハイームを含むと56cm）　羊皮紙製
トーラーケース：高さ92cm（リモニームを含むと98cm）、直径30cm　銀製
元全国魚卸売市場連合会会長、故長野政彦氏のご寄付によって購入

02

トーラー　高さ41cm（エーツ・ハイームを含むと71cm）、
全長23.395m　羊皮紙製（39枚）　19世紀

04

胸当て　高さ29cm、幅21.5cm　銀製

03

冠　高さ35cm、直径28.5cm　銀製

01 トーラーとトーラーケース

トーラーとは「教え」、「学び」という意味で聖書（キリスト教でいう『旧約聖書』）全体を指しますが、通常は聖書冒頭の『モーセ五書』、つまり『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』『申命記』の5つの書を指します。トーラーは、シナゴーグ（ユダヤ教会堂）で、主にシャバット（安息日：金曜日の日没前から土曜日の日没後までの約25時間）を中心に様々な機会に朗読されます。どの日にどの朗読箇所を読むか規定されていて、それぞれのシャバットの名前もその朗読箇所の聖句に由来します。トーラーは各シャバットごとに読み進められて、1年をかけて最初から最後まで全て読まれます。そして読了すると、翌週からすぐに最初から再び読み始められ、常に絶えることなく続けることが義務付けられています。トーラーの朗読に関する祝祭については、祭礼に関する解説の仮庵祭（スコット、シムハット・トーラー）や七週祭（シャブオット）の項をご参照下さい。トーラーケースの上部には、ザクロを意味するリモニーム（リンモン）とよばれる装飾具が豊穣の象徴として載っています。リモニームには鈴が吊り下がっていますが、シナゴーグの聖櫃からトーラーが取り出される時にこの鈴が鳴ると、人々は自分の祈りをやめて全体の儀式に参加します。

02 トーラー 03 冠 04 胸当て

長い歴史の中で世界各地に暮らしたユダヤの人々には、地域的な違いが存在します。中部東部ヨーロッパの国々を出自とするアシュケナーズ系ユダヤ人と中世以降イベリア半島（スペイン・ポルトガル）を指す、スファラド出身のスファラド系ユダヤ人（広義では北アフリカや中東出身者も含まれる）に大別され、それぞれ各地の地域文化に根ざす独特の習慣を持っています。トーラーの巻物は、アシュケナーズ系では刺繍されたマントで覆われ、スファラド系では金属製または木製のケースに入れて保管されます。つまり、このマントに包まれたトーラーはアシュケナーズ系で、もう一点展示されているトーラーケースに収められているトーラーはスファラド系です。ユダヤ教では中世以降、トーラーに対する特別な尊敬から高価な装飾が施されるようになりました。トーラーの巻物は、朗読時以外はあたかも王や大祭司の正装時のように飾られます。スファラド系のトーラーでは、トーラーケースの上部が冠の形をしており、その上部にリモニームを載せますが、アシュケナーズ系のトーラーでは2本のエーツ・ハイーム（巻軸のことで、「生命の木」を意味します）に冠を被せます。これはトーラーを女王に見立てたことを意味します。さらにマントで覆われた巻物あるいはトーラーケースの上に胸当てとよばれる飾り板が付けられます。そこには大祭司の胸当てを象徴する2頭の獅子が、十戒を記した2枚の板を掲げている図が表されています。胸当ての下方には、巻物が使用される当日のシャバット（安息日）や祝日の名称を刻んだ薄板を差し挟むための長方形の小さいくぼみがあります。

05

エトログ・ボックス　長さ17cm、幅11.5cm、高さ8.5cm　木製　19世紀　ベツァレル美術学校作

07

エトログ・ボックス　高さ23cm、直径10cm　ヤシの実製

06

エトログ・ボックス　長さ20.5cm、幅10cm、高さ12cm　銀製　19世紀　バグダッド

08

エトログ・ボックス　長さ14cm、幅8.5cm、高さ9cm　陶製　1987年　アメリカ、G.ヘコン作

09

エトログ・ボックス　幅5.5cm、高さ8.5cm

05 06 07 08 09 エトログ・ボックス

エトログとは、レモンに似た良い香りのする柑橘類の実で、秋のスコット祭（仮庵祭）で用いられます。エトログの他、ルーラブ（シュロの枝）とミルトスとヤナギの枝をシナゴーグ（ユダヤ教会堂）に持参し、それらを束ねたものを上下に揺らしながらテーヴァーまたはビマーといわれる説教台の周りを行列します。これは『レビ記』23章40節に由来する習慣ですが、これらの植物がそれぞれ何を意味しているのかは聖書では説明されていません。古来から様々な解釈がありますが、エトログについては味も香りも良いので、トーラーの知識と善行を象徴し、それを併せ持った模範的ユダヤ人を指しているともいわれます。エトログは多様な用途があり、食用とされたり、皮から抽出されたエキスは蛇にかまれた際の解毒剤として用いられたりしました。エトログを入れる容器は、銀製・陶製・木製など材質やデザインが多用で、美術工芸品化したものが多くあります。祭礼に関する解説のスコット祭の項もご参照下さい。

10

ハヌキヤ　高さ25cm、幅25cm　真鍮製　18世紀　ポーランド

11

ハヌキヤ　高さ11.5cm、幅10cm　ブロンズ製　19世紀

12

ハヌキヤ　高さ9.5cm、幅12cm　ブロンズ製　19世紀　エルサレム

13

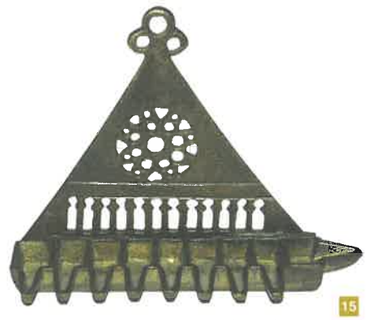
ハヌキヤ　高さ21.5cm、幅17cm　真鍮製　ガリラヤ

14

ハヌキヤ　高さ17cm、幅19cm　真鍮製

10 11 12 13 14 15 16 17 18 ハヌキヤ　19 大型ハヌキヤ

ハヌキヤは、キスレヴ月（太陽暦の11-12月）のハヌカ祭（宮清めの祭）で使用する燭台です。紀元前165年のシリアのアンティオコス・エピファネスに対する反乱（マカバイ戦争）で、シリア人の手から開放されたエルサレム神殿の中から、1日分の油しか入らない陶製の壷が発見されましたが、不思議なことにそれに油を入れて点火したところ、8日間燃え続いたといいます。紀元前164年にはギリシアの神が祀られていたエルサレム神殿を清めて再奉献しました。この灯火の奇跡を記念して、ハヌカ祭は8日間行われ、8日間を象徴する8枝と点火用の受け皿（シャマシュ）とを合わせて、通常9枝からなる燭台が用いられるようになりました。祭礼に関する解説のハヌカ祭の項もご参照下さい。



15

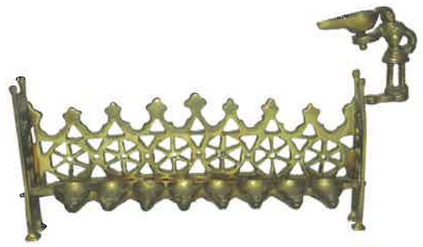
ハヌキヤ　高さ15cm、幅18cm　ブロンズ製
オリジナルは14世紀（本資料はイスラエル博物館の複製品）　リヨンあるいは北イタリア

16

ハヌキヤ　高さ13.5cm、幅16cm　ブロンズ製

17

ハヌキヤ　高さ5cm、幅12.5cm、奥行き7cm　銀製　1986年　アメリカ、H.ヴィログラド作



18

ハヌキヤ　高さ19cm、幅32.5cm　ポーランド

19

大型ハヌキヤ　高さ153cm、幅100cm　銀製　ダマスカス

20

メノラー　高さ19.5cm、幅27cm　ブロンズ製　コーチン

21

メノラー　高さ28.5cm、幅20.5cm　ガリラヤ

20 21 メノラー

七枝の燭台は、ユダヤ教の象徴的存在で、古代の会見の幕屋やエルサレム神殿で使用されました。「メノラー」はヘブライ語で「燭台」を意味します。その形状は、『出エジプト記』25章31-40節にあるように、シナイ山で神がモーセに細かく指示し、作るように命じた燭台に由来しています。メノラーは時代とともに様々な解釈がされてきました。神が世界を創造し、7日目に休息したことの象徴とされたり、七枝が大地の7大陸や7つの天を意味すると考えられたりしてきました。ユダヤ教の主要なシンボルとして、墓碑やシナゴーグ（ユダヤ教会堂）の入口や種々の祭具の装飾デザインなど、多様な場面で広く用いられています。

22

22

22

メギラー　高さ23.5cm（エーツ・ハイームを含むと40cm）、全長405cm　羊皮紙製（5枚）　マドリード

23

グラッガー　長さ31cm、高さ（柄を含む）21cm　木製　19世紀　ポーランド

24

グラッガー　長さ22cm、高さ（柄を含む）15.5cm　木製　20世紀　エルサレム

22 メギラー

メギラーとは巻物の意味で、メギラーというと『雅歌』『ルツ記』『哀歌』『コヘレトの言葉』『エステル記』の5書のいずれかが記されたもので、とくにプリム祭で読まれる『エステル記』の場合が多いです。ここでも『エステル記』が記されています。メギラーは、トーラーより小型の巻物で、羊皮紙を巻きつける巻軸も1本だけです。プリム祭は、『エステル記』に記されているユダヤ人滅亡の危機からの救済を祝う祝祭で、シナゴーグ（ユダヤ人教会堂）では、『エステル記』が朗読されます。祭礼に関する解説のプリム祭の項もご参照下さい。

23 24 グラッガー

グラッガーは英語ではノイズメーカーともよばれ、プリム祭の時、シナゴーグ（ユダヤ教会堂）において『エステル記』が朗読され、ユダヤ人の敵ハマンの名が読み上げられるたびに子供たちが音を立てて彼の名を打ち消すための道具です。祭礼に関する解説のプリム祭の項もご参照下さい。

25

セデル皿　直径33cm　銀製　18世紀　イラン

26

バルセロナ・ハガダー　縦26.8cm、横20.5cm　大英博物館蔵　ヴェラム製　161フォリオ　オリジナルは14世紀半ば　アラゴン地方

25 セデル皿

ユダヤ教の三大祝祭の1つ、ペサハ（過越祭）では、規定の食物（種なしパン、羊の前脚、ゆで卵、野菜、苦菜-わさび、果物のおろし汁と砕いたクルミの混ぜ合わせ）をのせる特別な皿が使用されます。このペサハの食事は、新しい意味を付与されて、キリスト教の「主の晩餐式」に引き継がれることになります。

26 バルセロナ・ハガダー

ハガダーとは「物語」の意味です。口伝の律法の一部で、観念的、歴史的、逸話的、民族的、伝説的、とさまざまな内容を持っていて、ユダヤ教の倫理や伝承を表現しています。ハガダーには、ペサハ（過越祭）のセデル（ペサハ初日の儀礼的晩餐）の際に、子供たちがペサハを祝う意味を問い、それに父親が答えるという問答形式の式文やユダヤ人の歴史を伝える詩文などが含まれています。ハガダーの式文を家族で読んだり歌ったりする儀式を通じて、家庭での民族教育が行われます。ハガダーは美しい挿絵のついたものが多く、本文はヘブライ語ですが、欧文と対照になったものもあります。このバルセロナ・ハガダーは、豊富な美しい挿絵が特徴的で、その画風と構成から14世紀半ばのスペインのアラゴン地方で制作されたと考えられています。他のスペイン製のハガダー同様、この写本には奥付がないので、その起源の確実な証拠はありませんが、挿絵のいたるところにバルセロナの紋章が見られるので、バルセロナの可能性が高いと考えられます。この写本はスペインからユダヤ人が追放された1492年以前にイタリアに運ばれたらしく、最後の頁に1459年にイタリア、ボローニャで購入されたことが記されています。

27

鳥頭ハガダー　縦27cm、横18.5cm　イスラエル博物館蔵　ヴェラム製　47フォリオ　オリジナルは1300年頃　ドイツ

28

サラエボ・ハガダー　縦22cm、横16cm　サラエボ国立博物館蔵　ヴェラム製　165フォリオ　オリジナルは1350年頃　バルセロナ

27 鳥頭ハガダー

1300年頃、ドイツ南部で作成されたこのハガダーの写本に登場する人物は、すべて鳥の顔をしているのが特徴です。アシュケナーズ系（中部東部ヨーロッパの国々を出自とするユダヤ人コミュニティー）の挿絵に特徴的なこの表現は、十戒の戒律の解釈に成立の由来があります。『出エジプト記』20章4節に記された偶像崇拝の禁止に基づいて行き着いた表現が、人の顔を描くことを避けることでした。また、鳥男たちがかぶっている先のとがった帽子は、ユダヤ人をキリスト教徒から区別するために1215年の第4ラテラノ公会議で議決された「目印」です。12世紀以降のキリスト教美術においても、ユダヤ人を表す印として、同様のとがった帽子をかぶった人物像が描かれることがあります。キリスト教の新旧約聖書に登場する人々は、イエスをはじめユダヤ人がほとんどですから、キリスト教美術における目印の帽子をかぶったユダヤ人の表現がすべて、反ユダヤ主義的意識を表した例であるとは単純にはいえません。しかし、エジプトで隷属状態にあった父祖たちの解放を記念し、異教徒の社会において被支配階層に生きねばならなかった当時のユダヤ人たちが、未来への希望を確認する機会でもあったペサハ（過越祭）で用いられるハガダーにおける表現では、その意味合いは大きく異なっていたはずです。現在はエルサレムのイスラエル博物館が所蔵しています。

28 サラエボ・ハガダー

スファラド系（イベリア半島を出自とするユダヤ人コミュニティー）ハガダーとしては現存最古の例で、バルセロナで1350年頃に作成されました。写本冒頭に、創世記からモーセの死までの聖書の場面を描いた34ページもの豪華な挿絵が施されています。写本中には、ワインの染みが残っている箇所があり、ペサハ（過越祭）のセデル（ペサハ初日の儀礼的晩餐）で多用されたことを裏付けています。この写本は、1492年にスペインのレコンキスタ（キリスト教勢力による再征服）によって、ユダヤ人コミュニティーがイスラム勢力とともにスペインから追放された際に持ち出されたと考えられています。そして1500年代にはイタリアにあったことが知られ、1894年にユダヤ人ジョセフ・コーヘンによってサラエボの国立博物館に売却され、現在も同館で所蔵しています。第二次世界大戦中にはナチス・ドイツの手から逃れるために、山中の村にあるイスラム教の聖職者の下に隠されたり、また1992年から1995年までのボスニア戦争時にもセルビア軍によるサラエボ包囲から守るために銀行の地下金庫で保管されたりして、この写本は数々の危機をかいくぐってきました。その後、国連やボスニアのユダヤ人コミュニティーの特別な支援によって2001年に修復を終え、2002年12月から常設展示されています。

29

ロスチャイルド詞華集　縦22cm、横17cm、厚さ11cm　イスラエル博物館蔵　ヴェラム製　473フォリオ　オリジナルは1479年　フェッラーラ

30

ウォルムス・マハゾル　縦41.5cm、横31.5cm　ヘブライ大学図書館蔵　ヴェラム製　226フォリオ　オリジナルは1272年　ウォルムス

29 ロスチャイルド詞華集

この写本は、1479年にモーゼス・ベン・エクティエル・ハコーヘンによって依頼されました。当時、イタリアにおけるユダヤ人は、ルネッサンスの文化をリードし、享受するフィレンツェのメディチ家やフェッラーラのエステ家など、キリスト教徒である貴族社会とも深い関わりを持っていました。この写本もルネッサンス期の写本装飾美術の影響を受けた、フェッラーラの工房において制作されたであろうと考えられています。この15世紀半ばから後半にかけて、エステ家の宮廷で制作に従事した最高の芸術家たちの様式を強く反映した豪華壮麗な写本は、50余りのヘブライ語の宗教的・世俗的書物をまとめています。宗教的書物としては、聖書の『詩篇』『箴言』『ヨブ記』、マハゾル（周期・サイクルの意味）とよばれる年間行事としての諸祝祭の典礼に用いられる祈祷書、その他多くの法的書物などが含まれています。世俗的書物としては、年代記と歴史的書物、哲学的・道徳的論文や科学書なども含まれています。この書物がいかに現在に伝えられてきたか、その歴史には不明な点も多いのですが、1832年から1855年まではイタリア、トリエステのソロモン・デ・パレンテのコレクションであり、その後パリのロスチャイルド家に売却され、第二次大戦中ナチス占領下のパリで盗難にあいました。その後1950年になって、ニューヨークで再び世に姿を現し、ロスチャイルド家に返還の後、現在はエルサレムのイスラエル博物館に所蔵されています。

30 ウォルムス・マハゾル

ヘブライ語で周期・サイクルを意味するマハゾルは、年間行事としての諸祝祭の典礼に用いられる祈祷書を指す、アシュケナーズ系（東部中部ヨーロッパの国々を出自とするユダヤ人コミュニティー）の用語です。13世紀、南ドイツのアシュケナーズ系ユダヤ人は、シドゥールとよばれる日課用およびシャバット（安息日）礼拝用の祈祷書から諸祝祭の典礼で用いられる祈祷書を区別するようになり、マハゾルがまとめられるようになりました。もともとは祈祷の先唱者（ハザン）用に作られたもので、ペサハ（過越祭）に先立つ4つのシャバットのための祈祷で始まり、その後にすべての大祝祭日、すなわちペサハ、シャブオット（七週祭）、ローシュ・ハシャナ（新年）、ヨム・キプール（贖罪日）、スコット（仮庵祭）のための祈祷が続きます。またそれぞれの祝祭で読まれる『雅歌』『ルツ記』『哀歌』『コヘレトの言葉』『エステル記』が含まれています。ウォルムス・マハゾルは、ライン河畔のウォルムスのユダヤ人コミュニティーによって13世紀以来長く使われていたもので、2巻に分かれていましたが、第2巻は15世紀に頻発したポグロム（ユダヤ人への集団迫害）によって失われ、現在の第2巻は写しになります。写本奥付には、書記のシムハ・ベン・ユダがそのおじラビ・バルク・ベン・イツハクのために書き、44週間かかって1272年1月1日に完成したと記されています。

31

スパイス・タワー　高さ19cm　銀製

32

スパイス・タワー　高さ17.5cm　銀製

33

スパイス・タワー　高さ16cm　銀製

34

スパイス・タワー　高さ19cm　木製　ベツァレル美術学校作

31 32 33 34 スパイス・タワー

シャバット（安息日）に用いられるスパイスを入れ、香を焚く容器（香炉）です。土曜日の夕方、シャバットとの別れであり、シャバットと新しく始まる週の区切りでもある、「隔て」を意味するハブダラの儀式を行い、シャバットが終わります。このハブダラの際にスパイスをくゆらせます。スパイスの香りをかぎながら、シャバットがいかにかぐわしく快い一日であったかを追想するのです。これは中世ヨーロッパで始まった習慣とされ、スパイスは通常ミルトスの葉を用います。祭礼に関する解説のシャバットの項もご参照下さい。

35

キドゥシュ・カップ　高さ13.7cm、直径6cm　銀製　現代

36

キドゥシュ・カップ　高さ9.7cm、直径7cm　銀製

37

キドゥシュ・カップ　高さ9.8cm、直径5.3cm　銀製

35 36 37
38 39 40 41

キドゥシュ・カップ

シャバット（安息日）が始まる金曜日の夕方に行われるカバラット・シャバットの祈りではまずワインを飲みますが、その時キドゥシュ（聖別）という祝福の祈りが唱えられます。このワインを飲む容器がキドゥシュ・カップです。シャバットだけでなく、他の祝日、特にペサハ（過越祭）の時にも用いられます。祭礼に関する解説のペサハ、シャバットの項もご参照下さい。

38

キドゥシュ・カップ　高さ15.7cm、直径7cm　ガラス製　現代　ヴェネツィア

39

キドゥシュ・カップ　高さ15.8cm、直径7.2cm　銀製

40

キドゥシュ・カップ　高さ9cm、直径5cm

41

キドゥシュ・カップ　高さ7.5cm、直径7.3cm　陶製

42

ハブダラ・セット　高さ20cm

43

シャバット・ランプ　高さ20cm、幅27.5cm　ブロンズ製　19世紀　ツファト/ガリラヤ

42 ハブダラ・セット

これは、キドゥシュ・カップとスパイス・タワーを組み合わせたもので、土曜日の夕方、シャバット（安息日）との別れであり、シャバットと新しく始まる週の区切りでもある、「隔て」を意味するハブダラの儀式を行う際には分解して用います。塔の形をしたスパイス・タワーの屋根の上には、バイオリンを弾く人物が乗っていますが、これはユダヤ人家族の物語『屋根の上のバイオリン弾き』を表しています。祭礼に関する解説のシャバットの項もご参照下さい。

43 シャバット・ランプ

シャバット（安息日）が始まる前、金曜日の夕方になると家庭ではシャバット・ランプに火を灯します。シャバットに入ってしまうと火をつけることも含めて、労働が禁じられているからです。シャバット・ランプの燭台が2本または4本用意されているのは、十戒における安息日に関する規定が、『出エジプト記』20章8節の「安息日を心に留め、これを聖別せよ。」と『申命記』5章12節の「安息日を守ってこれを聖別せよ。」の2箇所に記されていることを象徴していると解釈されています。祭礼に関する解説のシャバットの項もご参照下さい。

44

ツェダカー・ボックス　高さ17cm、幅10cm　銀製　ベツァレル美術学校作

45

ツェダカー・ボックス　高さ17cm、幅11.5cm　陶製

46

ツェダカー・ボックス　高さ6cm、長さ9.5cm、幅5cm　銀製

44 45 46 ツェダカー・ボックス

ツェダカーとは、もともと「正義」の意味ですが、同時に「慈善行為」や「施し」も意味します。ツェダカー・ボックスは、シナゴーグ（ユダヤ教会堂）の入口に置かれていて、人々はそこに喜捨を投じます。ユダヤの世界では、同胞の相互補助の精神が伝統的に普及しており、同胞中の貧窮者、とくに孤児や寡婦を保護救済することは最も基本的な神の命令とされています。シャバット（安息日）は、日頃神の救いから阻害されている困窮者を援助する日とされており、礼拝の終わりに喜捨を捧げる習慣があります。各家庭でも母親が子供たちに貧しい人のため、小遣いの一部をツェダカー・ボックスに入れさせる習慣があります。

47

ネル・タミード　長さ87cm、幅（鳥十ランプ）18.5cm　鉄製

48

ネル・タミード　長さ30cm、幅16cm　ガラス製　19世紀　チュニジア、ジェルバ島

49

ネル・タミード　長さ44.5cm、幅26cm　ブロンズ製　19世紀　ドイツ

50

ネル・タミード　長さ61cm、幅11.5cm

47 48 49 50 ネル・タミード

シナゴーグ（ユダヤ教会堂）で、トーラーを納める聖櫃の前に天井から吊り下げられるランプです。これは『レビ記』24章2-4節に由来する慣わしで、夕暮れから朝まで主の御前では絶えず火が灯され、神の臨在と会衆の幸福を象徴するものです。古来、新しいシナゴーグの献堂式の際、最も重要な儀式はトーラーを聖櫃に納めることとネル・タミードに火を灯すことでした。その形態は、製作地によってさまざまです。

51

割礼（ブリット・ミラ）器具　ナイフ：長さ15cm、皿：直径10.5cm、つまみ：長さ7cm　銀製　モロッコ

52

52

割礼用カップ（コス・ハブラハ）　高さ5cm、直径3.8cm

53

キッセー・エリヤフー　高さ155cm、幅58.5cm　木製　キルヤト・ガド工房

51 割礼（ブリット・ミラ）器具
52 割礼用カップ（コス・ハブラハ）・割礼参考図

ユダヤ人男子は生後8日目に割礼を受けます。これは、神とユダヤ人との契約（ブリット）のしるしとして行われ、その際に子供にヘブライ名が付けられます。これが一生を通じて彼がシナゴーグ（ユダヤ教会堂）でよばれ、ケトゥバー（結婚契約書）と墓石に記される名前になります。割礼は、現在は病院で行う場合が多いのですが、伝統的には家庭やシナゴーグで行われてきました。健康に問題がある場合以外は、生後8日目に行われ、その日がシャバット（安息日）であっても実施されます。手術はモヘルという専門家が行います。割礼の際には、子供の近親者の1人がサンダックという名親となって、預言者エリヤが「臨席」していることを示す、キッセー・エリヤフー（エリヤの椅子）といわれる特別な席に腰掛け、膝に子供を抱きかかえます。手術の際に、子供は痛みを和らげるためのぶどう酒を割礼用カップ（コス・ハブラハ）で飲まされます。割礼の聖書的な根拠は『創世記』17章にあり、ここで神はアブラハムと契約を交わします。その内容は「あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける」（10節）というもので、「生まれてから八日目に割礼を受けなければならない」（12節）と決められており、割礼が「体に記される」（13節）、「契約のしるし」（11節）と見なされるのです。

53 キッセー・エリヤフー
（エリヤの椅子）

男児の割礼の際に用いられる椅子です。割礼の際には、子供の近親者の1人がサンダックという名親となって、預言者エリヤが「臨席」していることを示す、このキッセー・エリヤフー（エリヤの椅子）といわれる特別な席に腰掛け、膝に子供を抱きかかえます。

54

ケトゥバー　縦76.5cm、横49cm　羊皮紙製　オリジナルは1787年　ローマ

55

ケトゥバー　縦53.5cm、横43.5cm　紙製　オリジナルは1860年　イスファハン

56

ケトゥバー　縦58.5cm、横39cm　紙製

57

ケトゥバー　縦43.5cm、横27.8cm　紙製　現代

54 55 56 57 ケトゥバー

「書かれたもの」を意味するケトゥバーとは結婚契約書のことで、元来女性の権利の保護を目的としています。伝統的にはアラム語で作成され、時に豪華な彩色が施されます。ケトゥバーは結婚式以前に用意しておく必要があり、結婚生活における夫の責任に関する規定や離婚した場合に夫が妻に支払う生活扶助についての記載が不可欠です。この契約書には2人の証人の署名が必要で、結婚式においてその文面が読み上げられた後に花嫁に手渡されます。ユダヤ教における結婚は、婚約（キドゥシーン）と結婚式（ニッスィーン）の2つの要素からなっています。婚約は証人たちの前で行われ、花婿から花嫁に贈り物（現在は、大抵の場合に結婚指輪を贈ります）を渡し、婚約を宣誓し、祝福が唱えられて、1杯のワインを新郎新婦で分かち飲みます。その後の結婚式では、新郎新婦はフッパーとよばれる、彼らの新居の象徴である婚礼用の天蓋の下に立ちます。そこでも祝福を受け、1杯のワインを分かちます。花婿は花嫁の右手の人差し指に指輪をはめ、ラビ（ユダヤ教の律法教師のことで、ヘブライ語で「わが主人」、「我が師」を意味します）がケトゥバーを朗読し、花婿は花嫁にケトゥバーを手渡します。それから人生最大の喜びの際にもエルサレム神殿の崩壊を悼むために、花婿がワイングラスを割るという儀式が行われ、披露宴へと続きます。

58

結婚指輪　長さ4cm、幅2cm、高さ7cm

58 結婚指輪

ユダヤ教の結婚式では、花婿が花嫁に結婚指輪を贈り、指輪は花嫁の右手の人差し指に嵌められます。この指輪は、上部と下部が分かれて、中に小さな香入れが納められています。日常嵌めている結婚指輪はシンプルなものですが、結婚式で用いられる指輪は、彼らが属しているコミュニティーで共用する特別に豪華なものです。指輪上部の建物の装飾は、夫婦の新しい家庭とエルサレムの神殿を象徴しています。（結婚の儀式に関する詳細は、通過儀礼やケトゥバーの解説をご参照下さい。）

天蓋下での新郎新婦

59

メズーザー　高さ13.5cm　ブロンズ製　コーチン

60

メズーザー　高さ8.8cm、幅6cm　銀製

61

メズーザー　高さ21cm（飾りを含むと24cm）、幅9cm（扉を開けた際10.5cm）　真鍮製　マドリード

62

メズーザー　高さ8cm、幅6cm　銀製　現代　ベン・イェヘズケル作

63

メズーザー　大（太い）高さ12cm、小（細い）高さ12cm　木製　エルサレム

64

メズーザー　高さ12.5cm　獣骨製

59 60 61 62 63 64 メズーザー

シナゴーグ（ユダヤ教会堂）の入口やユダヤ人家庭の玄関や部屋の出入り口等には、このメズーザーが取り付けられています。これは『申命記』6章9節の「あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」という神の命令に従った習慣で、ユダヤ教徒の基本的信仰告白であるシュマアを記した『申命記』6章4-9節と11章13-21節を記した経札（羊皮紙の小片）が内部に収められています。この習慣が生まれたのは第二神殿時代に遡りますが、中世以後、悪霊から守ってくれる一種の護符としても考えられるようになりました。ユダヤ教徒は出入りに際してメズーザーに直接接吻するか、指で触れてからその指に接吻して敬虔を表します。容器には、「シャダイ（全能の神）」を意味するヘブライ文字（シン）が書かれている場合があります。

65

メズーザー　高さ18cm　ガラス製

66

メズーザー　高さ6.5cm、幅3.8cm　ブロンズ製　ポーランド

67

メズーザー　高さ12cm、幅3.5cm　ガラス製　現代　アメリカ、S.カガン作

68

メズーザー　高さ14cm、幅5.5cm　粘土製　現代

65 66 67 68 メズーザー

シナゴーグ（ユダヤ教会堂）の入口やユダヤ人家庭の玄関や部屋の出入り口等には、このメズーザーが取り付けられています。これは『申命記』6章9節の「あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい」という神の命令に従った習慣で、ユダヤ教徒の基本的信仰告白であるシュマアを記した『申命記』6章4-9節と11章13-21節を記した経札（羊皮紙の小片）が内部に収められています。この習慣が生まれたのは第二神殿時代に遡りますが、中世以後、悪霊から守ってくれる一種の護符としても考えられるようになりました。ユダヤ教徒は出入りに際してメズーザーに直接接吻するか、指で触れてからその指に接吻して敬虔を表します。容器には、「シャダイ（全能の神）」を意味するヘブライ文字（シン）が書かれている場合があります。

69

ヤド　長さ19.5cm　銀製　ロシア

70

ヤド　長さ25.5cm　銀製　現代　ベン・イェヘズケル作

71

ヤド　長さ30cm　銀製　イエメン

72

ヤド　長さ23cm（環を含むと25cm）　銀製　北アフリカ

73

ヤド　長さ20.5cm　銀製、貝　バルカン

69 70 71 72 73 ヤド

ヘブライ語で手を意味するヤドは、トーラーを朗読する際に神聖なるトーラーに直接触れずに朗読箇所を示すための指示棒のことで、トーラーの巻軸（エーツ・ハイーム）の上端から吊り下げられます。先端は細くなっており、人差し指を伸ばした握り拳の形になっています。多様な素材で作られ、デザインにも手が込んだものが多くあります。

74

ヤド　長さ22.5cm（鎖を含むと32.5cm）　銀製

75

ヤド　長さ17.5cm　木製

78

ヤド　長さ19cm（鎖を含むと38cm）　銀製　エルサレム

77

ヤド　長さ30cm（鎖を含むと55cm）　テルアビブ

74 75 76 77 ヤド

ヘブライ語で手を意味するヤドは、トーラーを朗読する際に神聖なるトーラーに直接触れずに朗読箇所を示すための指示棒のことで、トーラーの巻軸（エーツ・ハイーム）の上端から吊り下げられます。先端は細くなっており、人差し指を伸ばした握り拳の形になっています。多様な素材で作られ、デザインにも手が込んだものが多くあります。

ユダヤ教の戒律世界との出会い

ユダヤ教やイスラム教のことを、戒律宗教と呼ぶことがある。唯一の神が、一人の預言者を選び出して自己の意志を伝え、それを万人に知らせ、その意志に絶対服従させるからである。この場合、人間は、自分の好みや都合によって、神様を選ぶことはできず、徹底して唯一神の教えに服さねばならない。したがって、そのためには、なによりも神の言葉を学習しなければならないのである。ここでは、歴史的に古く、かつキリスト教ならびにイスラム教の出現に対して影響を与えたユダヤ教を中心に、自分の経験と知識に照らして、戒律のもつ文化的意義、とでもいうものを明らかにしてみたい。まずは、戒律ということに思い至ったきっかけとして、私がエルサレム郊外のあるユダヤ人居住地のシナゴーグで経験した出来事からはじめたい。

それは、1983年の夏のことであった。留学を開始して2年目に入った頃で、どうにか現地語の現代ヘブライ語に耳が馴れ、現地の生活習慣にも徐々に適応できるようになっていた。生きたユダヤ教の生活の現場を知ろうという目的で、もちろんそれまでも安息日の礼拝に参加してきたが、いよいよ意を決して、平日の早朝にも毎日シナゴーグへ通うようになった矢先のことであった。そこは小さな会堂であるが、安息日の土曜の朝には、100人もの人々で溢れかえる。しかし、さすがに平日の早朝、仕事に出かける前に、祈りにやって来る人は少ないとみえて、いつも10人前後で祈っていた。10人になるかならないかは、重要である。特に、聖櫃からモーセ五書（ヘブライ語でトーラーと呼ばれる）の巻物を取り出して朗読することになっている月曜と木曜の朝は、10人集まらないとこの行事を行うことができない。そのために、誰かが仲間を呼びに出ることが何度も目撃された。

さて、私は、通い始めた最初の日から、思いもよらない経験をすることになった。私の姿を見た人たちが、目配せをして、その中の年配の一人が私のもとへあるものを持ってやってきた。それは、13歳以上のユダヤ人成年男子が、平日の朝の祈りで身につけるべき祈りのショール、タリートと、祈りの小箱テフィリーンであった。これを私も身につけよ、というのである。私語を慎んでいるために、言葉ではなく仕草でそう語りかけていた。促されるまま、見よう見まねで、左の腕をまくり上げ、祈りの小箱を二の腕に巻きつけ、革紐を7回腕に巻き、革紐のはしを左手に巻きつけ、もう一つの小箱を額にあてがって、革紐を胸の前にたらし、それが済むと、さらにショールを肩に廻して用意は整った。これを見届けると、指導してくれたおじさんはうなずいて、

ユダヤ教の戒律世界との出会い

祈祷書の頁を繰って今読んでいる箇所を指で示すと、もといた自分の席に戻っていった。

これによって私は、他の人たちと同じように、ユダヤ教徒になったような気分になった。そのときに、また思いもよらない思いにとらわれた。自分がやることなすことに対して、意識がひどく研ぎ澄まされているように感じたのである。それまで漠然と思っていたことは、習慣化されると、人は自分の行為に対して無自覚になり、特に意識せずにある行為を行っていくということだった。ところが、この平日の朝、ユダヤ式礼拝が命ずる身なりは、習慣化されているはずなのに、逆に日常の生活行為が神の教えのもとに行われることを意識化させるように考案されていることを自覚したのである。ユダヤ教徒気取りになった、というのは、身なりだけのことではなかった。むしろ、身なりを整えよという命令を実行する中で、自分の心にユダヤ教徒が抱くはずの意識が芽生えたといえるかもしれない。祈るためだけでも、そのための積極的な準備が求められ、それをした上でなければ、祈りさえもできない。ユダヤ教というのは、それほどに一つ一つの行為に絶えず意識を注ぐことを要求する教えなのだ。儀礼的行為然り、倫理的行為然りである。

後になってわかったことだが、この身なりになるのは、シュマアと呼ばれるユダヤ教の信仰告白を唱えるためであること、しかも、そうした身なりになることの根拠は、その聖句そのものに由来しているということであった。「聞け、イスラエルよ。貴方の神である主は、唯一の主である。貴方は、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、貴方の神である主を愛しなさい（申命記６章４，５節）」。聖句はその先で、その神の教えを、「額に置いて覚えとし、腕に結んで忘れないようにせよ」と命じている。左腕と額につける二つの小箱の中には、トーラーの聖句からの抜粋が書かれた紙片が収められているのである。この信仰告白の意味するところは、絶対帰依の心で、命がけで、全財産にかけて、唯一神であるイスラエルの神を愛することを実行しようという決意に他ならない。そして、その神の意志とされるものが、モーセ五書であり、これが「教え」という意味のヘブライ語、トーラーと呼ばれるのである。日本語では、これを「律法」と呼んでいる。これは、トーラーの訳語にあてられたギリシャ語のノモスに由来する。これこそは、神がシナイ山でモーセに啓示した永遠不変の教えと信じられてきたものである。

この経験は、私に、戒律というのは、人の振る舞いをきわめて自覚的に意識させるものではないか、ということを思い起こさせるものであった。少なくとも、ユダヤ教の戒律についていえることは、人の行為を縛ることを通して、意識を縛り思考を縛るものである、という想定を与えてくれるものであった。私は、この想定をずっと持ち続けてきた。その後、ある機会に、スリランカの僧院のヴィデオを見たとき、仏教僧が、自分の足取りを一歩一歩確かめるように注意深く歩きながら思索する姿に、私は自分の経験が重なり合うのを感じ、ユダヤ教の在家の戒律と上座部仏教の出家僧の戒律が一本の糸で結ばれるのを感じた。ユダヤ教の戒律とは、仏教における戒律の意義に比すべきものではないかという想定が、はたして説得力をもちうるだろうか。本論では、そのための素材を提供したいと思う。

なお、早朝に経験したこの身なりの件の顛末であるが、その後1週間ほど経過する内に、毎朝のことでもあり、すっかり習得して自分で準備できるようになった私は、ますます得意になって礼拝に浸っていたが、あるとき、ふだん見かけない人が会堂にいた。帽子をかぶり背広にネクタイで身を正したその初老の人は、礼拝の最中からときどき私を凝視していたが、礼拝終了後、私はその人から別室へ促され、そこでユダヤ人か否かを問われた。違うと答えると、ならば改宗しなさい。今からでも連れて行ってやろうという。それはあまりに突然のことだったが、後でわかったことは、タリートとテフィリーンを身につけて祈ることは、ユダヤ教徒にのみ命じられたことであって、異邦人はしてはいけないということ、したがって、その人の目に私はユダヤ教徒になりたがっている異邦人と映ったようであった。私は、当初、異邦人であっても、シナゴーグで祈るときはこうした格好をしなければならないのだと思い込んでいたのであった。それにしても、私にこれらのものを身につけるように指導してくれたシナゴーグの人々は、私がユダヤ人か否か余り考えずに、さりとて異邦人ならばつけてはいけない、ということもしいて考えなかった寛容で素朴な人々であったということである。それ以後、私は、異邦人として、タリートもテフィリーンもつけずに、ほぼ1年間、毎朝の礼拝に参加し続けることになった。しかし、テフィリーンとタリートを外して臨んだ礼拝は、どこか学習のための観察に変わっていた。

『思想の身体：戒の巻』（松尾剛次編著、春秋社、2006年）所収の拙論「一神教と＜戒＞――ユダヤ教的特徴」pp.64－69より転載。

東京大学大学院人文社会系
研究科・文学部教授
市川　裕

ユダヤ教とユダヤ人の歴史

パレスチナの時代区分	年　代	出　来　事
カナン時代（青銅器時代）	前19世紀	アブラハム、イサク、ヤコブの時代。　創世記12-50章
	前18世紀中頃	ヤコブ一族が末子ヨセフの助力でエジプトへ移住。 創世記37-50章
	前13世紀中頃	モーセ率いるイスラエル人がエジプトの隷属から逃れ、カナンに定住。 出エジプト記
王国時代（鉄器時代）	前1000年頃	イスラエル王国最初の国王サウルが預言者サムエルとともに活躍。 サムエル記上
	前997－966年	ダヴィデによる統治。エルサレムを征服。 サムエル記下
	前967－928年	ソロモンによる統治。エルサレム第一神殿の建設。 列王記上1-11章
	前928年頃	南北に分裂。北はイスラエル王国、南はユダ王国を名乗る。 列王記12章
	前9世紀中頃	預言者エリヤとエリシャが活動。 列王記上17-21章　列王記下2-13章
	前772年頃	イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされる。 列王記下17章
	前8－6世紀	ユダ王国で、預言者イザヤ、エレミヤが活動。 イザヤ書　エレミヤ書
	前587年頃	ユダ王国がバビロニアに滅ぼされる。第一神殿の崩壊。 列王記下24-25章
ペルシア時代	前587－539年	バビロニアへ強制集団移住。バビロン捕囚。 エゼキエル書　イザヤ書40-55章
	前539年頃	バビロニアからパレスティナへ帰還が始まる。 エズラ記1-2章　イザヤ書56-66章
	前515年頃	エルサレム第二神殿の建設。 エズラ記3-6章　ゼカリヤ書　ハガイ書
ヘレニズム時代	前301－142年	プトレマイオス朝とセレウコス朝の支配。 マカバイ記一1章　マカバイ記二1-7章
ハスモン朝時代	前164－63年	マカベアの叛乱によってハスモン朝として独立を達成。 マカバイ記一、二
ローマ時代	前63年	ローマによるパレスチナ支配の開始。パレスチナの地はローマの属州となる。
	1世紀頃	パリサイ派、サドカイ派、エッセネ派といった分派が生じる。
	70年	対ローマへの戦争の結果、第二神殿が破壊され、再び離散が始まる。
	132－135年	バル・コホバによるローマへの叛乱が起こるが鎮圧される。
	3世紀	ラビ・ユダ・ハ・ナスィによって「ミシュナー*1」が編纂される。
ビザンチン時代	400年頃	「エルサレム・タルムード*2」の編纂が始まる。
	500年頃	「バビロニア・タルムード」の編纂が始まる。
イスラーム時代	8－9世紀	バビロニア（現在のイラク）でラビ・ユダヤ教の学塾が発展。カライ派の発生。
	10－12世紀	スペインのユダヤ人共同体が黄金時代を迎える。
	11－13世紀	ラシ、マイモニデス、ナフマニデスなどの聖書注釈者がフランスやスペインで活躍。
	1291年	イギリスから追放される。
	13－15世紀	ユダヤ教神秘主義、カバラーが発達。「バヒールの書」や「ゾハールの書」が成立。
	1492年	レコンキスタ（キリスト教勢力による再征服）の結果、ムスリムとともに スペインから追放される。
	16世紀	イベリア半島から、異民族に寛容なオスマン帝国への移住が増す。
	1665年	未曾有のメシア運動であるシャブタイ派運動が発生。
	18世紀中頃	バアル・シェム・トーヴにより、東欧を中心に神秘的敬虔主義が発達。
	18世紀中頃	モーゼス・メンデルスゾーンにより、西欧でユダヤ啓蒙主義（ハスカラー）が興隆。
	18－19世紀	フランス革命を機に、西欧と中欧においてユダヤ人解放が進み、次第に市民権を獲得。
	19世紀	西欧社会への同化とともに、ドイツや合衆国で改革派ユダヤ教が起こる。
	1885年	改革派の基本方針となるピッツバーク綱領が採択される。
	1880－1920年	東欧やロシアで反ユダヤ主義が高まり、ポグロム（集団迫害）が頻発。
	1897年	テオドール・ヘルツルが、第一回シオニスト会議を招集。シオニズム*3が興隆。
	1915年	フサイン・マクマホン書簡によってイギリスがアラブ独立の支持を約束する。

パレスチナの時代区分	年　代	出　来　事
イスラーム時代	1917年	バルフォア宣言により、イギリスがパレスティナにユダヤ人国家建設を約束。
イギリス委任統治時代	1919年	国際連盟がパレスティナをイギリスの委任統治領に定める。
	1933－1945年	ナチスによって約600万人のユダヤ人が殺され、東欧のユダヤ人コミュニティーが壊滅。
イスラエル時代	1948年	イスラエル国家が建設される。

＊1　ミシュナー（教え・反復）とは、タンナイーム（勉学する者）とよばれる賢者たちによる口伝律法に関する意見や裁定を集成して、2世紀末に編纂された口伝律法の正典的結集のこと。ユダヤ人に法を守らせる目的で書かれた、6部に分かれた宗教法である。

＊2　タルムードとは、ミシュナーとミシュナーに関するラビ（律法教師）の注釈であるゲマラによって構成される。タルムードには2つの版があり、1つがエルサレム・タルムードで400年頃に編集された。もう1つのバビロニア・タルムードは、550年頃に編集され、より重視されるようになった。現在では単にタルムードといえば、後者のバビロニア・タルムードを指す。

＊3　シオニズム[Zionism]とは、19世紀に発生し、イスラエルの地へのユダヤ民族の帰還とユダヤ国家の創設を提唱した、政治的かつイデオロギーの的な運動のこと。語源となったシオン[Zion]とは、ダビデ王が居城を築いた丘の名前で、転じてエルサレムのことを指す。

比較的近年出版された和書の参考文献の主なものです。

◎アブラハム・コーヘン著、村岡崇光訳、『タルムード入門』、教文館、1997年。
◎アラン・ウンターマン著、石川耕一郎、市川裕訳、『ユダヤ人：その信仰と生活』、筑摩書房、1983年。
◎石川耕一郎訳、『過越祭のハガダー』、山本書店、1988年。
◎市川裕著、『ユダヤ教の精神構造』、東京大学出版会、2004年。
◎市川裕［ほか］著、『聖書に生きる：トーラーの成立からユダヤ教へ：展示解説』、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部美術博物館、2006年。
◎上田和夫著、『イディッシュ文化：東欧ユダヤ人のこころの遺産』、三省堂、1996年。
◎エレーナ・ロメーロ・カステ--ヨ、ウリエル・マシーアス・カボーン著、那岐一堯訳、『図説ユダヤ人の2000年；歴史篇、宗教・文化篇』、同朋舎出版、1996年。
◎カス・センカー著、佐藤正英監訳、『ユダヤ教』、ゆまに書房、2004年。
◎シーセル・ロス著、長谷川真、安積鋭二訳、『ユダヤ人の歴史; 新装版』、みすず書房、1997年。
◎ジョン・リッチズ著、池田裕訳・解説、『聖書』、岩波書店、2004年。
◎「西洋美術研究」編集委員会編、「特集美術史とユダヤ」、『西洋美術研究』、No.4、三元社、2000年。
◎関根正雄著、『イスラエル宗教文化史』、岩波書店、2005年。
◎関谷定夫著、『図説 旧約聖書の考古学；増補改訂版』、ヨルダン社、1986年。
◎関谷定夫著、『考古学でたどる旧約聖書の世界』、丸善、1996年。
◎関谷定夫著、『聖都エルサレム：5000年の歴史』、東洋書林、2003年。
◎関谷定夫著、『シナゴーグ：ユダヤ人の心のルーツ』、リトン、2006年。
◎ダン・コーシ＝シャーボク著、熊野佳代訳、『ユダヤ教』、春秋社、2005年。
◎チャーレス・スズラックマン文・イラスト、中道久純訳、『ユダヤ教：イラスト版オリジナル』、現代書館、2006年。
◎土岐健治著、『初期ユダヤ教の実像』、新教出版社、2005年。
◎土岐健治著、『初期ユダヤ教研究』、新教出版社、2006年。
◎ニコラス・デ・ラーンジュ著、柄谷凛訳、『ユダヤ教入門』、岩波書店、2002年。
◎ニコラス・デ・ラーンジュ著、柄谷凛訳、『ユダヤ教とはなにか』、青土社、2004年。
◎ノーマン・ソロモン著、山我哲雄訳・解説、『ユダヤ教』、岩波書店、2003年。
◎ハーマン・ウォーク著、島野信宏訳、『ユダヤ教を語る』、ミルトス、1990年。
◎ポール・ジョンソン著、石田友雄監修、阿川尚之、池田潤、山田恵子訳、『ユダヤ人の歴史; 上下巻』、徳間書店、1999年。
◎松尾剛次編著、『思想の身体：戒の巻』、春秋社、2006年。
◎マーティン・ギルバート著、池田智訳、『ユダヤ人の歴史地図』、明石書店、2000年。
◎マルタ・モリスン、ステファン・F・ブラウン著、秦剛平訳、『ユダヤ教』、青土社、2004年。
◎ミルトス編集部編、『やさしいユダヤ教Q&A』、ミルトス、1997年。
◎R.C.ムーサフ＝アンドリーセ著、市川裕訳、『ユダヤ教聖典入門：トーラーからカバラーまで』、教文館、1990年。
◎ヤコブ・ニューズナー著、山森みか訳、『ユダヤ教：イスラエルと永遠の物語』、教文館、2005年。
◎山本祐策著、『ユダヤ人の婚姻』、近代文芸社、2001年。
◎吉見崇一著、『ユダヤの祭りと通過儀礼』、リトン、1994年。
◎吉見崇一著、『ユダヤ教小辞典』、リトン、1997年。
◎ルーベン・ターナー著、高階美行訳・解説、『ユダヤ教のお祭り』、同朋舎出版、1989年。
◎レイモンド・シェインドリン著、高木圭訳、『物語ユダヤ人の歴史』、中央公論新社、2003年。
◎ロバート・アロン、アンドレ・ネエ・ル、ヴィクトル・マルカ著、内田樹訳、『ユダヤ教：過去と未来』、ヨルダン社、1998年。

展示・編集後記

今回の『祈りの継承―ユダヤの信仰と祭―ジュダイカ・コレクション1』展は、今年5月に行われた『納戸の奥のキリシタン』展に引き続き、昨年5月に開館した当館にとって2度目の特別展になります。

ジュダイカの実物資料をまとまった形で公開する展示としては、日本では初めての機会です。本展が実現できたのは、西南学院大学名誉教授の関谷定夫先生と奥様の玲子さんに全面的なご協力をいただくことができたからです。関谷先生が長年にわたる研究で集められた多数のジュダイカ資料は、個人コレクションとして一般の方の目に触れる機会はほとんどありませんでした。当館が、キリスト教やその母胎であるユダヤ教に主眼をおいた展示を目指しているという趣旨にご理解・ご賛同いただき、本展開催の運びとなりました。

ユダヤ教やジュダイカという、日本ではあまり触れることのない宗教・文化・美術工芸をテーマにした展示には、基本的に解説を丁寧にしないと分かりづらいという面がありますが、それは同時に「字が多くて読むのに疲れる」という印象が目立つ危険性も生んでしまいます。その矛盾を常に感じながらも、私たちとは暦の数え方が異なり、年間を通じて多様な儀式を行うユダヤの人々の世界や時間の捉え方をご来館の皆さんにも少しでも感じていただき、興味を持っていただく機会になればと願い、展示や図録を構成しました。

世界中の情報が瞬時に大量に入手できる時代ではありますが、それに反するようにニュース性のある話題では出てこない、名もない人々の日常生活に思いを巡らせる機会は意識しないと持ちづらくなっている気がします。当館は、実際の形ある資料を展示することで、そうした部分に思いを巡らせるきっかけを作っていきたい、展示というものの意義を見出していきたいと考えています。

最後になりましたが、関谷定夫・玲子先生ご夫妻を筆頭に、たびたび相談に乗ってくださいました東京大学教授市川裕先生他、多くの方々にご協力やアドヴァイスをいただきました。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

2007年10月
西南学院大学博物館学芸員　**米倉　立子**

西南学院大学博物館・第2回特別展
『祈りの継承 ―ユダヤの信仰と祭― ジュダイカ・コレクション1』図録

印刷・発行　2007年10月

執　筆　関谷定夫、市川裕、高倉洋彰、米倉立子
編　集　米倉立子
発　行　西南学院大学博物館　〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13－1　電話 092-823-4785
印刷所　凸版印刷株式会社